

別の小ロマン派のこと

加藤宗登

1.

1974年に刊行された日本フランス語フランス文学会編集の「フランス文学辞典」には *Petits romantiques* の項目がある。井村実名子氏の解説で、そこに Francis DUMONT, *Les Petits Romantiques Français (Cahiers du Sud, 1949)* が参考書としてあげてある。

これは No. special で、次のような詩人・作家を主としてとりあげている。

Aloysius BERTRAND, Pétrus BOREL, Philarète CHASLES, DEFONTENAY, Alphonse ESQUIROS, Xavier FORNERET, Charles LASSAILLY, G. de NERVAL, Philothée O'NEDDY, Alphonse RABBE, この他に Charles NODIER, Alexandre DUMAS père 等々。

大体1830年以降に主作品を書いた人たちだ（但し A. RABBE は除く）。

日本でも「小ロマン派」と称して一部の詩人を紹介した書物は他にもある。

篠田浩一郎氏の「フランス・ロマン主義と人間像」（未来社、1965）の中の第二章「小ロマン派点描」。LAMIRAL, Célestin NANTEUIL, Charles LASSAILLY, Henri MURGER, Pétrus BOREL がとりあげてある。Théophile GAUTIER, *Histoire du Romantisme* の青春群像がちらほらする。

澁澤龍彦の「悪魔のいる文学史」（中央公論社、1972）の中にも「小ロマン派群像」の章がある。Xavier FORNERET と Pétrus BOREL には別々に一章を当ててあるので、この群像の中にとりあげられているのは Alphonse RABBE, Charles LASSAILLY, Philothée O'NEDDY, Emile CABANON, DEFONTENAY 。

ここにも *Cahiers du Sud* (1949) と *Histoire du romantisme* が生きている。

「フランス文学史」（白水社、1979）にも「小ロマン派と地方の詩人」という小項目がある。それには《社会的にも文学的にも日の目を見ずに終わった「小ロマン派」 *Petits romantiques* と称される詩人群がある。「青年フランス派」、「bousingos」あるいは「frénétiques」を名のり(…)》とあって、Pétrus BOREL や Philothée O'NEDDY, Xavier FORNERET, Joseph BOUCHARDY, Henri-Alphonse ESQUIROS, それに地方で活躍した詩人として Aloysius BERTRAND, Maurice de GUÉRIN 等の名前があげてある。

このようにして、日本では、*Cahiers du Sud*の研究及び Théophile GAUTIER の *Histoire du romantisme* を土台にして、「小ロマン派」の名を冠した詩人たちが大方えらばれていると言ってもよい。

この人たちをそれぞれ性格づける点を *Cahiers du Sud* から拾ってみると (F. DU-MONTによる introduction より)、

1. 彼等には共通して frénésie の表現がある。
2. idées sociales révolutionnaires を持つ。
3. convictions politiques は非常に漠然としている。
4. 大さわぎの、また煽動的な呪詛の割には (BOREL, O'NEDDY, LASSAILY) 彼らの役割は VEYRAT, SAINTE-BEUVE, George SAND よりも効果的でなかった。
5. 彼等の anticléricalisme は完全には意味をもたなかった。
6. 彼等を明確に特徴づけるものは運命に対する révolte である。
7. 文学によって自己を主張することを望んだ。
8. 彼等の tentatives の extreme originalité.

以上のような特徴を読むだけでも私たちの興味を強くひくものがある。

日本で好んで使用されるような「小ロマン派」という呼称はそのような刺戟的な個性と結びついてしまった感がある。

フランスでは少し異っている。1970年代に刊行された16巻本の ARTHAUD 版 *Littérature française* の第12巻 *《Le Romantisme I ~ 1820-1843》* には petits romantiques という呼び方も、まとめ方もしていない。

2.

Cahiers du Sud (1949) より約50年前に、Eugène ASSE によって *Les Petits Romantiques* (Ed. de Paris, 1900) という本が出ている。今は SLATKINE REPRINTS (Geneve, 1968)で入手できる。こちら、フランスの詩人を扱っているのに顔ぶれは全く異っている。Antoine FONTANEY, Jean POLONIUS, (Comte Xavier LABENSKY), Jules de RESSÉGUIER, Edouard d'ANGLEMONT が主な対象となっている。

彼等の作品を見れば、この小ロマン派の性格はわかることだが、Eugène ASSE の解説によると「Romantisme の全体を包み、その意味と性質を見通すには、今日その名前すら残っていないような作家たちを充分知らなければならない。彼等は自分たちの欠点をもって、そしてまた彼等が信奉者となった一派の主義を誇張することで、それをより惹き立たせ、その性格をさらに目立たせようとひたすら努めたのだ。彼等が、les Petits romantiques と私たちの呼ぼうとしている人たちである。」

この説明によると、彼等是一派のために、その主義をもり立てようと専らそのために精出しているのだが、その énergie が、1830年を分水嶺として、全く色合のちが

った形をとるようになったというのだろうか。現実の政変が青年作家たちに何か直接的な影響を与えただろうか。

les petits romantiques というのは、どこか作品の中に grand になれなかった欠点を蔵している詩人・作家 (poètes, écrivains romantiques) のことであって、日本では何故か30年代以降の第Ⅱ世代の青年詩人・作家群に特定しすぎているように思える。つまり1830年という革命の年が、全く新しい時代を創造したのだろうか。それとも Empire, Restauration の青年詩人たちに較べて1830年以後の青年たちは果して独創的だったのか。思いつくままに彼等の行動をいくつか挙げてみよう。

GAUTIER の筆になる *Histoire du romantisme* の中に特記される青年たちは Petit Cenacle(1828頃) に集まった友愛と自由奔放の集団で、小ロマン派として我が国の文学史には中の数人が必ず数えられている。彼等にとって(文学) 思想上の《chef rayonnant》は Victor HUGO だった。同様の cénacle を、1820年に既に Emile DESCHAMPS が rue Saint-Florentin の自宅で開いている。VIGNY, HUGO, Jules LE-FÈVRE, SAINT-VALRY, Gaspard de PONS 等が常連で、それに DESCHAMPSの早くからの友人 Alexandre SOUMET が加わり、SOUMET と同じ Toulouse 出身の Jules de RESSEGUIER もこの会に紹介され、一同の仲間となる。いわば groupe des amities と言える最初の cénacle だった。

ただ、ここで注意しておきたいのは、HUGO 兄弟 (Victor, Abel, Eugene) が、1819年12月に *Conservateur littéraire* 誌を創刊するが、royaliste, catholique, classique の立場を宣明していた。CHATEAUBRIAND の *Conservateur* にあやかって命名したようだが、文学を全面に押し出した雑誌にしようとしても、当時の文壇が政治抜きでは成り立たなかったことを表している。

Conservateur の庇護を受けるばかりか、創刊前から、同じ royaliste の新聞 *la Quotidienne* 紙から協力の約束を受けていた。

1820年という年は「政治があまりにも横柄に文学を支配した。また自分がどこへ行くかよくわかっていないそんな年だった」と René BRAY は *Chronologie du Romantisme (1804-1830)* で言っている。このような政治の干渉、圧力は Restauration の間中、絶えず文学の独立を阻み、何人かの作家・詩人を転向させた大きな理由であろう。

rue Saint-Florentin の仲間 (HUGO もいるわけだが) が *Conservateur littéraire* に協力して行ったのは自然の成り行きだった。だからと言って、*Conservateur littéraire* がこの Cénacle の機関誌では全くなかった。

文学的主張は強く出さないで、むしろ友愛のもとに Cenacle が形成される例はこの頃すずに見られたわけである。

3.

Hernani 初演に触れて、Theophile GAUTIER は、古典派に対するロマン派の勝利を決定づけたことになっているが、このような戦闘とても、1809年、新旧両派の激突のあったことが演劇史に残っている。

Népomucène LEMERCIER の *Christophe Colomb* (1809) の上演がそれである。*Tartuffe révolutionnaire* (1795) で大当りをとり (Directoire によって禁止されたが)、彼は classique の演劇伝統から解放されようと努力した。Ph. VAN TIEGHEM や René BRAY によると、この騒ぎは演劇史上最大の反響を呼んだもの (失敗) で、大胆にも彼は〈時〉と〈場所〉の unités に違反し、genres の混同も強行した。前日、事前に彼なりに違法行為の釈明を行っているが、当日の平土間席では古典派の面々がすっかり興奮して待ち構える。第1回上演には様子を窺って旧派にも自己抑制があったが、2回目には遂に古典的伝統を守るためといって学生達300人が上演の妨害に立つ。les unités 支持派はステッキをふるって猛然と反対派 (改革派) に襲いかかった。騒然とした中で中間派の人たちは舞台の上にとび上って難をさけた。警官が入り、学生たちは逮捕、連行された。多くの負傷者と1名の死亡者があった。上演は打ち切りとなり、騒ぎは静まったが、この時は unités 派の勝利に終わった。

新時代に対応し、共感を得る演劇は、もう古典劇の trois unités の規則にはない、殊に temps と lieu の一致は大きな障害であるというのが大方の改革者の意見であった。彼等は英国から、ドイツから romantisme の影響を積極的に取り入れ、フランス演劇の復活を願ったのである。

この事件をきりに、LEMERCIER は改革への願いをきっぱり捨て去り、翌年 (1810年) Académie に詫びを入れ、Athénée における彼の講演にも厳正に古典劇の規則を遵守する誠意のあることが認められ、(ナポレオン皇帝とは彼の *Charlemagne* や *l'Hy-men* により仲たがいでいたにも拘らず) Académie Française の会員に選ばれた。

4.

この推移を見ると、「エルナニ」以上に「クリストフ・コロンブス」の時代がはるかに険しい社会状況にあったと想像される。彼らはただ古典劇改革の試みだけで、激しい攻撃的となった。

この他、30年代の中世趣味、怪奇趣味も、第II世代の専有ではない。ドイツでは、NOVALIS、SCHLEGEL 兄弟、TIECK、ACHIM D'ARNIM、F. BRENTANO のグループがそうであり、イギリスでは更に早い時期から見られる。BYRON の作品を通して、1819年にフランスにも Vampire ものが大流行を見て、Porte-Saint-Martin 劇場、Vaudeville 劇場、Variétés 劇場で Vampire 劇が上演された。Charles NODIER はこの時、作

者として積極的にこれを取り入れた。この時の成功は〈romantisme d'un jour〉で終わったのだが。

怪奇趣味の極め付きとして、GAUTIER や NERVAL の仲間が〈どくろ杯〉で葡萄酒を回し飲みする遊びも、BYRON が且て金髪、赤茶色さまざまの若い遊び女、友人等と Newstead の修道院で夜中に催した大酒宴の二番煎じであることは GAUTIER の書いているところであるが、更には彼らの領袖 HUGO の *Han d'Islande* (1823. 執筆は1821) の怪物 Han がしゃれこうべで血をすすすあのショッキングな場面に、より直接的に取り付かれていたのかも知れない。

1830年代の青年たちの奇行も、文学上の大胆な試みも実は frénésie として10年も前に Charles NODIER, Victor HUGO あるいは BALZAC 等により作品の中にお手本が示されていたり、経験的に〈regain〉であったりすることに、もう少し注意を払うべきだろう。帝政期から Restauration を通じてのいわゆる premiers romantiques が、複雑な政治、文学の絡みの中で、転向したり(SOUMMETや F. PONSARD や J. de RESSÉGUIER 等)、Charles NODIER のように巧妙に変身を演じたり、GUIRAUD のように「用心ぶかい、demi-teinte の romantique の典型」(E. ASSE)であったり、そしてまた Alphonse RABBE (1786-1829) — 彼は明らかに第 I 世代の romantique ではなかろうか — が自から命を断ち、Antonin FONTANEY は Restauration の中で生活にも、恋愛にも、社会的にもまともに望みが果されず、苦渋に包まれたまま、一家族次々と胸を冒され、世を去る。

5.

彼等については、あまりにも知られることが少なく、あるいは無関心に葬られてはしまいか。

例えば、1820年代の petits romantiques の一人、J. de RESSÉGUIER を説明するのに D. COUTY 教授は参考書として先に紹介した E. ASSE の *Les Petits Romantiques* (1900) ただ一冊のみをあげている (BORDAS の文学辞典)。したがってそこに記された初期研究の不確かな部分は、そのまま今もって辞典の資料の下地になっている。以下、問題点を拾って見ると、

1) Jules de RESSÉGUIER は1820年に HUGO と知り合になったが、その前年に発刊された *Conservateur littéraire* の設立者の一人と説明してあるのは誤りであろう。J. de RESSÉGUIER は1820年になってからの協力者にすぎない。

2) この詩人の作品の形式の simplicité を指摘して、〈そのことは、どこであれ、気まぐれな sonnet monosyllabique の楽しみを排除するものではない〉と注記している。これは「ばらのために」というあの一音節のソネを意味しているととるのは無理ではあるまい。

この詩については、故鈴木信太郎先生が最初、先生の「フランス詩法」に Jules de RESSEGUIER 作として紹介され、後に「フランス文学辞典」（白水社）において RESSÉGUIER, Albert de (1816-76)の項目で、「この「バラのために」という極度に技巧的な作品は、*La France littéraire* 誌に掲載された。現在この詩は、父の Jules の作品、あるいは兄 Paul の作品と誤り伝えられることが多い。」と、いわば「詩法」中の文章を訂正しておられる。

3) 《名誉と宗教と愛とを混ぜこぜにした、技巧的な小説 *Alwéria* (1835) を除いて》とあるが、これは明らかに *ALMARIA* (Paris, ALLARDIN, 1835)である筈だ。

以上述べたところから、我が国では、「小ロマン派」という呼称を宛てる時、すでに固有名詞的なニュアンスで語られすぎではないか、そしてまた Restauration の研究を軽視する形で、第Ⅱ世代の特異性を originalité と結びつけて読んで、正しい理解は得られるのかとも思うのである。

フランスでもこの時期の研究は先の辞典の解説に見られるように充分であるとはとても言えない。果して研究に価する作品が無いのだろうか。第Ⅱ世代については、GAUTIER の文章が友情の伝わる楽しいもので、くわえて *Cahiers du Sud* の特別号が surréalisme の評価も定まった誠に適当な時期の編集であったことも幸いして、「小ロマン派」編集の意図は一気に伝わったと考えられる。

第Ⅰ世代では政治の暴力的介入が強力であったし、いきおい破壊的な試みは青年の自由意思を助長するどころではなかったろう。それは、むしろ暴挙以外の何ものでもなかった。七月革命に向って、政府は保守反動政策を益々押し進めて行った時期である。第Ⅱ世代のように作品によって運命とか、社会とか政治への反抗を示すことがまづ不可能だった。

彼等が作品によって認められるためには、古典の禁制を批判し、否定するような tentatives であるより、作品の中に新しい感覚——de la couleur locale や l'inspiration intimiste や la naïveté des sentiments など——を表現して行くことで、少なくとも作品自体の完成度を高めることが重要だったろう。つまり、普遍的、哲学的な主題から、大革命以後、身近な、個人的な問題へと彼等はゆるやかではあるが、社会の変革と人々の関心の推移を自からの好みに従いながら読みとって行く、それが彼等、第Ⅰ世代の作品だったと思う。彼等はすべてマンネリ化した小詩人たちであったわけではない。*Débats* 紙によっていた古典派の批評家 HOFFMANN でさえロマン派の勝利を予見していた。そしてロマン主義の新しさは Révolution politique の文学における延長にすぎない(1815.2)と考えている。*Muse française* の趣意書を書いた GUIRAUD も、その中で、文学を社会の表現であるとしている。新しい時代を迎えて、即ち大革命によって政治、社会は変わった。その中で文学が立ち止まったま

まであるわけがないという考え方は、殆んどすべての人々の胸の中を占めていた。ただ伝統的な形式を破ることに文壇的、社会的な大きな抵抗があり、演劇の分野では何よりも、老人の royalistes、古典劇派つまりフランスの伝統を守ることに国威のかかっていることを意識する人たちと、青年の romantistes すなわち外国から新しい劇をとり入れ、フランス演劇を活性化させることを必要と考える人たちとの威信をかけた対立の構図が先々に勝負のきまることを予見しながらもがっちりと監視の網を張っていた。

これは上に述べたように、大革命の余燼が政治から文学へと広がってくすぶり続け、やがて再び火の手が上がるまでの現象と見てよい。

以上